

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第48号
平成23年10月
生涯学習課文化財係



今里城館の ようす

今里集落は、井ノ内から延びる低い丘の上であり、人の活動は、旧石器時代以後、連綿と続いてきたことが知られています。

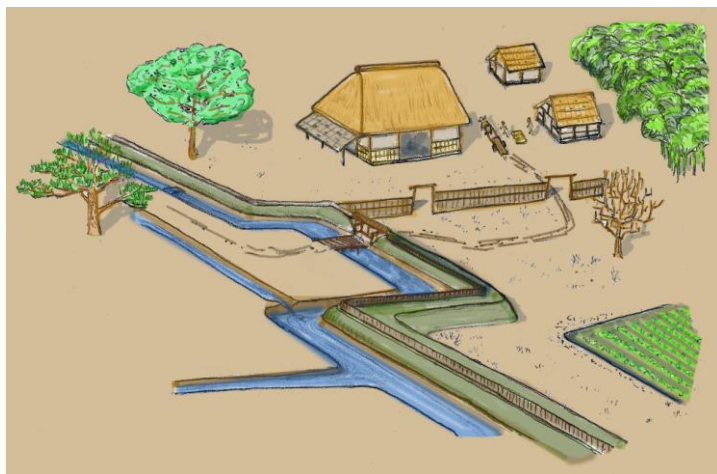
今里集落の南部には、「城山」の地名がみられ、有力者「能勢」氏の城館所在地と考えられています。発掘成果では、戦国時代の折れ曲がる堀の一部や、年号と人名が墨書きされた木の札、日にちが墨書きされた土器などが見つかり、城館のようすや当時の暮らしぶりが浮かび上がってきました。その様子を出土品と写真や解説図で紹介し、城館が築かれた時代背景を解説します。

展示期間：平成23年10月4日（火）～12月27日（火）＊図書館休館日は除く。

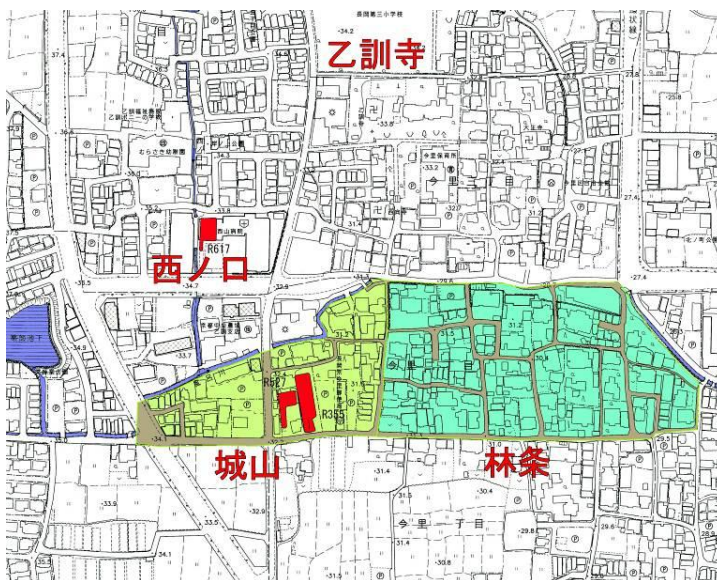
今里城館の場所とくらし

15世紀後半の応仁・文明の乱頃、能勢頼弘が今里に居館をかまえました。館は、折れ曲がった堀で囲まれた、防御機能の高いもので、戦国時代の16世紀中葉までありました。この城館の所在地は、最近まであった小字「城山」という地名から、名残を知ることが出来ました。能勢氏の城館は、四角く堀を巡らせただけでなく、複数の区画が組み込まれていました。また、16世紀前葉の小字「林条屋敷」は、東と南は堀、西は道、北は川で囲まれていたと仁和寺文書にあり、こちらを今里城館とする説もあります。「林条」地域での調査では、柱穴などが見つっていますが、建物としてのまとまりとして捉えられていません。しかし、1点だけですが、軒平瓦が見つかっていて、城館の主要施設が近在することを示唆しているのかもしれませんが。

小字「城山」の発掘調査で見つかった堀からは、16世紀前葉に暮らした「のせひこ五郎」の木札が出土し、当時の生活をしのばせる羽子板なども見ついています。



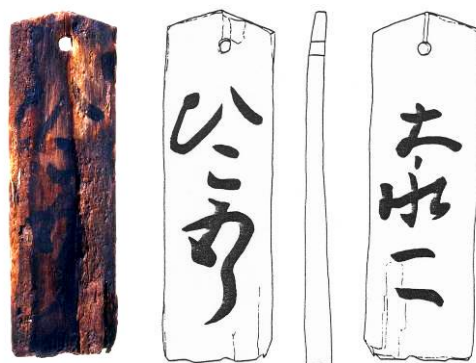
今里城館西部の復元想定図



今里城館の主な調査地点と旧地名

「ひこ五郎」木簡

片面に「ひこ五郎」、裏面に「大永二」と墨で書かれた木札が、堀から出土しました。上部には、^{きふだ}紐穴があります。同じ年に、九条家領小塩荘の年貢米納税者をまとめた「山城國小塩庄帳」にある「のせひこ五郎」の木札と見られます。彼は、「いまさと」(今里)の小字「かめい」(亀井)にある1反の田地の収穫から九条家に4斗1合5夕の年貢米を納めていました。



「ひこ五郎」木簡

多彩な出土品

堀などからは、墨書きされた土器や、歯を黒く染める化粧液を作った壺、彩色の一部に赤い色が残る羽子板、建築部材や土壁の塊など、多彩な出土品がありました。

これらは、今里城館の施設や生活模様をしのばせてくれます。



日にちが表裏に書かれた素焼の皿



左 お歯黒壺に使われた備前焼の壺
右 彩色のある羽子板

折れ曲がる堀

幅 5~7m、深さ 1.2~2m の堀が、南北方向に折れ曲がりながら掘られていました。堀の東に沿って、土塁が築かれていたものと思われます。堀を渡る橋のあった所より南は、堀が西へ張り出していて、橋を渡る人物を監視、攻撃できる構造(横矢掛かり)になっています。



折れ曲がる堀(南から)